



石黒宏美フレッシュに登場

はじめまして。7月から済生会第二病院に赴任しました、石黒宏美です。今年の4月に新潟大学の産婦人科に入局したばかりの、フレッシュ産婦人科医です。出身は三条市で、三条高校→代ゼミで苦悩の1年間を過ごす→新潟大学医学部入学→何とか6年間で卒業→新潟市民病院初期研修医として2年間研修→今年の4月から産婦人科入局という当たり障りのない経歴です。

「あれ？三条市の産婦人科石黒・・・」と思った三条通のあなた。そう、かの有名な三条市のレディースクリニック〇黒とは・・・関係ないのです。三条市には石黒内科医院もあります。今度こそ！！・・・これまた関係ないのです。三条市には石黒が多いのでしょうか。



石黒宏美医師

三条市といえば、「カレーラーメン」。突如登場したこのB級グルメに18年間三条市民だった私はビックリ仰天。「えっ、食べたことないけど・・・」。食べたこともなければ、見たこともないので、三条のカレーラーメンについて聞かれても答えられず、曖昧な返事をする日々です。でも、我が町三条市のどなたかが「三条市はカレーラーメンで！」と決めたに違いないので、応援したい。三条に食べに帰る暇がないので、食べたことある方はぜひ感想をお聞かせください。

真面目な話をすると、私はさまあ〜ずが好きです。熱狂的なファンではないですが、深夜番組の"さまあ〜ず×さまあ〜ず"の観覧に2回くらい行ったことがあります。番組の前説はつぶやきシローなんです。つぶこまれてなんぼのつぶやきシローは一人だとあまりおもしろくない。たまたま一緒に観覧に行った友人がつっこんで、爆笑をとっていました。さまあ〜ず二人をカッコいいと思ったことはなかったのですが、実際みると二人ともシュツとしており、登場した時はつい黄色い声で叫んでしまいました。さまあ〜ず好きの方、ぜひ声をかけてください。本当に真面目な話をすると、まだまだ産婦人科医として半人前ですが、周りのベテランの先生方、助産師さんに指導を受けながら頑張りますので、よろしくお願いします。

7月から産科外来の担当が一部変わります

石黒医師の着任に伴い、7月から産科外来の担当医が一部変わります。月曜日にこれまで金曜日担当だった山田京子医師が移ります。火曜日の長谷川功医師、水曜日の藤田和之医師、木曜日の吉谷徳夫医師はそのまま、金曜日に石黒宏美医師が入ります。

市民病院がBFHに認定

新潟市民病院(中央区鐘木、片柳憲雄院長、660床)が、ユニセフから「赤ちゃんにやさしい病院(BFH)」に認定されることがこのほど明らかとなりました。8月3日-4日に東京都で開催される「第22回母乳育児シンポジウム」で正式に認定証が授与されます。

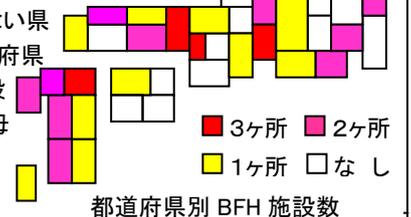
当院が平成20年に新潟県で初めてBFHに認定されてから、5年ぶりの県内2施設目のBFHとなります。BFHに認定されるには、適切な母乳育児支援によってお母さんが(赤ちゃんも)楽しく母乳育児を行っており、しかも1ヶ月健診時点で80%以上の方が完全母乳となっていることが必要です。これには、助産師や産科医の熱意だけでなく、病院全体が母乳に向けて一枚岩になることが重要です。医院ですと、院長が号令をかけさえすれば比較的容易にそういう状況を作ることができますが、大病院でBFHを目指す場合、大きなエネルギーが必要となります。その意味で大きな組織をまとめ上げた関係者のご努力は称賛に値します。



市民病院は、母体胎児集中治療室(MFICU=6床)と新生児集中治療室(NICU=9床)を有する総合母子周産期医療センターです。県内で1、2位の分娩数がある当院と、県内の周産期医療の要である市民病院がBFHに認定されたことで、今後新潟県の母乳育児がますます推進されることが期待されます。

右の図は都道府県別のBFH認定施設の数(本年7月時点)を示しています。日本で一番、2番目にBFHに認定された病院がある岡山県、福岡県を中心とするエリアと、「母乳王国」富山県と石川県の北陸地方で最も母乳育児が活発となっています。

しかしまだBFH施設のない県も15もあり、1ヶ所だけの府県も多数です。BFHが2施設となった新潟県もようやく母乳育児が盛んな県の仲間入りができたようです。



《情報》▼「新潟市民病院がBFHに認定されたことを喜んでるなんて、済生会の人ってずいぶん人が良いんですね。県内で唯一のBFHであった方がステイタスが高いでしょう」と思われた方もいらっしゃるでしょう。そうです、人がいいんです(笑)。実際はBFHの基準の一つに「地域に母乳育児の輪を拡げていること」があり、それを実践しているだけです。でも地域の他の施設がBFHに認定されることは、当院の実績にもなります。「お友達を会員に紹介すると〇〇差し上げます」と一緒です、何ももらえませんが。▼市民病院の母乳推進の中心人物である、総合母子周産期医療センター長(新生児科)の永山善久先生が、当院の長谷川医師と大学の同級生であること、助産師同士も両院間で顔なじみであることも大きく、お互いに交流があり、定期的に母乳の研究会なども開催しています。特に当院の巴亦圭子看護師長は、BFH認定をユニセフから委託されている「日本母乳の会」の委員であり、市民病院のBFHを強くアピールしていました。▼永山医師は、1000グラムに満たない小さな赤ちゃんが生まれた時などは、「1滴でもいいから母乳を出してくれ、赤ちゃんの口に塗るだけでもいいんだ」と母乳の大切さを身をもって実感しています。早産などで小さく生まれたり、いろんな状況で具合の悪い赤ちゃんもどうしてもいます。これを支えてくれるNICUの先生、スタッフの方々が母乳を大切にされているのは、心強く嬉しい限りです。